

空



2009年

SORA 28号

吾亦紅 (28) | 1

柴田 佐知子

玄海へ棚田は稲穂押し出せり

増えすぎし鈴虫に家震へだす

稲の香や紺に暮れゆく外輪山

たてがみを収めし馬や吾亦紅

顔暗くなる無花果を食べるとき
月光の一と間に殺気走りけり
そのあたりひきずつて蛇穴に入る
半ばより神も乱れて里神楽
冬麗や拳のごとき黒砂糖
火を消して黙つて帰る消防車

草の花

高倉和子

青々と山裾暮るる九月かな
秋晴や自転車で行く旧街道
病棟の窓浮き上がる稲光り
泣き出してしまへば楽な秋思かな
振り返るたびに青くて秋の海
夜に入りて水音高き曼珠沙華



どの部屋も灯して夜の長さかな

念入りに鏡を拭きて秋愁ひ

不揃ひの鶏頭揺るときもまた

父は立ち母は座りて庭の月

月の夜の遊びだしたる影いくつ

手放しでほめられし頃草の花

秋の雲乗せて白壁通りかな

昔なら歩いて登る柿の山

戸口まで煙流るる秋収め

・十五夜・

「今日は十五夜、月が綺麗！」と携帯にメールが来て慌てて月を見る。そういえば昨日、バス停で見上げた月が大きくて美しいと思っただのに今日はすっかり忘れていた。ベランダから身を乗り出して見る月は確かに綺麗だが少し味気ない。

月見といえば、子供のころはとても楽しい行事のひとつだった。今思えば、庭に大きな台を出し月見だんごを食べながら家族揃って見上げたあの頃の月が一番美しかったような気がする。

今でも、月の美しい夜には、父と母は縁側に出て庭の月を眺めているという。

赤い羽根

中田みなみ

街並の端まで月の黒瓦

秋風や真中より澄む雨後の川

花茗荷此処ぞここぞと咲きてをり

老人の日ベンチに年齢を訊ね合ふ

茸狩採れるつもりの籠を抱き

あつさりと採れし茸にとまどへり



女学生の頃の話。朝、茶の間で祖母と母が新聞を前にして泣いていた。何かと見ると戦時中の食糧難で動物園の象が殺されることになったという記事であった。どうも我が家のDNAは動物に弱いらしい。42年前、初めて、故細見綾子先生の婦人句会に入れて頂き、最初の吟行

縄張りて松茸山の事件めく

くらやみに笑ふ真つ赤な毒茸

身に入むやつまづく程の猿の墓

割れ石榴底まで紅を尽しけり

猪おどしおのづと待てり次の音

無住寺の当番札や柿の秋

朱に染めて愛のいろとす赤い羽根

赤い羽根性善説を信じをり

一葉落つ何もせぬ間に午後となり

は井の頭公園であった。俳句界には全く足を踏み入れたばかりで、それまで伯母が歌人だったので、時折、半ば強制的に短歌を詠ませられていたものの、季を入れなくてはと緊張し、出句した「秋の園皮たるませて象歩く」「長き髭地にひれ伏して馬追すいどの死」の二句が思いがけず、特選と秀逸を頂き、俳句って案外簡単だナーと思いつ込んでしまったのが、どうもつまづきの始まりらしい。あの頃、動物園に行つては、作句しており、句友達に第一句集は「動物園」ねと云われていた。動物の観察は本当に面白い。檻の中の、ゴリラ用の椅子に撫然と腰掛けているゴリラが、日の動きに合わせて椅子を移動しているし、又別のゴリラはお婿さんをはるばる九州から連れて来てもらったのに、見向きもしない。飼育係に恋をしているからだそう。最近、惹かれた句に男性の句友の作。「沖縄忌水牛の死を誰も言はず」がある。

体調を整えて、又動物園に行つてみようと思つている。

空作品評

柴田佐知子

金魚買ふ仰向きの死を想ひつつ

荒井千佐代

子供のとぎ、私も金魚を飼っていた。弱つてくると、金魚はふくらんだ腹を上にして、力なく浮いてくる。触ると鰭を動かし反転して戻すが、次第にそれも出来なくなる。「仰向きの死」は非情ともいえる的確な描写であり見事な表現である。この世に生を受けたとき、その生の向こうには、既に死が重なっているのである。「金魚買ふ」という平和な日常の一景を暗転させ深淵を見せた秀作。

柿紅葉無傷といふは気のひける

服部早苗

波乱万丈の生涯に遠く一生が送れるなら幸運といえるだろう。しかし、それは平凡とも言えないことのできそうだ。それほどオーバーなことではなく恋の痛手でもいいのだが、そのような傷も負ったことがない身は、どこか面白味にも欠けるような気もする。また傷を持つ人に対して「無傷といふは気のひける」の感覚も納得。服部さんはこのような人間の微妙な感覚をすつとすくい取る名手である。

渋柿を剥き終へし手のごはごはす

樋口みのぶ

干し柿にする渋柿をいくつも剥いた経験がある人は、柿の渋にまみれた手が「ごはごはす」の感覚に納得するであろう。面白い表現である。

五感とつに滅びへ向かひ日向ぼこ

柴田志津子

頷いてこと足るよはひ菊脛

安武農子

一句目は旧俳号青山悠さんの作品で、今号より本名に変更された。俳人協会の大会ではへ形代に書きて立派な齢かなが選者特選とのこと。生まれ落ちたときからみな滅びへと確実に歩を進めているのであるが、体を通してまざまざと実感するのは、やはりある年齢を越えてからであろう。形代に書いた自分の年齢にほうと驚き「立派な齢」と言い切る向日性がまた立派。掲句では季語「日向ぼこ」が悠々の配合である。

二句目「頷いてこと足るよはひ」もまことにうまい。おらかな響きをうけた下五の「菊脛」が齢を愛でる効果をあげている。齢をひとつ加えることは句の幅がひと回り広がり、更に句境が自在になることなのだ。素敵な二句である。

曼珠沙華一世をかけし仇討も

中条さゆり

曼珠沙華烈士といふは自害して

田岡千章

〈曼珠沙華落暉も薬をひろげけり 中村草田男〉
〈曼珠沙華抱くほどとれど母恋し 中村汀女〉と
「曼珠沙華」が引き出す世界は豊かだ。期せずして今号は物語性の強い句が並んだ。澄んだ空気の中に咲く曼珠沙華の鮮烈な赤が溢れる。句もまた鮮烈。

日は西に男の懺悔は稲穂の前 長 憲一

「日は西に」という大きな詠み出しと「稲穂の前」という情景が日本の原初風景を見るような不思議なスケールを醸し出している。ミレーの晩鐘のような印象も受けるのだが、大きく違うのは「男の懺悔は」である。はて、と迷わされる。面白く。

一人旅終へし我家の夜長かな 山内 碧

(旧名森紀子)

「夜長」は秋の深まりと共に夜が長くなったと感じる趣のある季語である。一人旅の寂とした影を曳きながら、安堵の響きが感じられる「夜長」である。

水だけを見て金魚玉運びたる 織田高暢

「金魚玉」は金魚を入れて軒先に吊るす球状のガラス容器。水をこぼさぬように金魚玉を運ぶときの様子が的確に詠まれている。余分なもの

は省き正確に詠んだ強さがある。

ガスの火に秋刀魚一尾を斜めに置く 青木朋子
「斜めに置く」はうまい。秋刀魚の長さが見事に表現されている。一点を掴むことで、対象の全像が鮮明に現れてくる。

収穫祭野菜に顔が描いてあり 永原 朱

秋の稔りも無事収穫した祭での寸景。いかにも手作りの祭という雰囲気伝わってきて愉快だ。

秋の蜂桃の切り株甘さうな 中原俊之

かまきりの翅ひろげたる夕日かな 岸 千手
一句目の桃の切り株への敏感な感受、二句目の緑の薄い翅と大きな夕日。小さな生き物と一体になったかのような視線である。

鬼灯を揉むたび母へ近づけり 片田きく

柏餅母は教へぬ葉のありか 川鍋明子

一句目は母恋いの句。「近づけり」とあることがかえって切ない。二句目は楽しい。柏の木はそうは生えていない。いつか場所を教えてもらってください。

空集

柴田佐知子選

太鼓山車片むきて橋渡りけり
油照り標語づくめの庁舎かな
爽やかやまたも阿修羅の背に廻る
狐のかみそり名水までの道灯す
火の国は水湧くところ秋澄めり
たちまちに大きくなりし踊の輪
ふところの笙を取り出す放生会
曼珠沙華一世をかけし仇討も
一人来て棚田一枚刈り始む

福岡 中条さゆり



稲揺れて手刈りの頭見えにけり
地に遊び川に飛び込む裸の子
福岡 大地 真理

自らの幅を溢れて滝落つる
滝壺へ柱状節理崩れ落つ
葡萄狩まづは鋏を開く閉づ
蝉あまた聯隊跡に生まれけり
鼻でんと座る唐獅子秋の空
踊子の息をはずませ戻りけり
猫脚膳高々積みば鴟猛る
昼顔の線路に迫る蔓の先
叩かれし蚊の移し絵となりにけり
きりぎりす翅ぼやかして鳴きにけり
耳たぶに風の渦巻秋はじめ
巫女の鈴振ればひぐらし応へけり
遊びたき子が子を誘ふ蛍草

長崎 鳳 蛭 華